
きみと笑顔は僕の心の中で・・・

雪那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

きみと笑顔は僕の心の中で・・・

【著者名】

雪那

N8261B

【あらすじ】

幼馴染で何もかもそろつている涼と晃は涼の誕生日プレゼントとして付き合つことになる。しかし、遊園地へデートへ言つた帰り涼の身に悲劇が起こる。そして、涼の死後、晃の周囲では摩訶不思議な出来事が・・・

東京都国里市1 6 - 4 - ライシン321号

伊山 晃

ハツ！晃は悪い夢でも見たかのように息を切らし起き上がった。
そして窓の外を見て言つた。

「晴れ…か」

するとその時、コンコンコンコン

「晃？起きてる？」

コンコンコンコン

「晃？」

晃はすぐ起きとドアを開けた。

そこには涼が制服姿で立っていた。

「何？」

晃はドアを開けてすぐに発した。

すると涼は、

「今日から学校でしょ？何、寝巻きでいるの？早く着替えなさいよ。」

「ああ、はいはい」

晃はそう言つとドアを閉め制服に着替え始めた。

涼は晃の幼馴染で誕生日が一緒、学校も一緒、アパートも一緒の女の子だ。

学校が始まると毎朝晃を迎えてくる。

ガチャ

「ハワーじゃ行くか？」

晃は着替えを済まし部屋から出た。すると涼は晃の背中を押し

ながら、

「まだでしょー…おばさんにお線香…」

「あつはいはい」

また部屋に戻り線香を焚いた。

晃の母は、去年死去、交通事故だつた。

「んじゃ、行きますか！」

「そうだね」

二人は学校に向かつて歩き出した。

「ねえ晃、今日は何の日か覚えてる？」

涼が口を開いた。晃は思わず、

「えつ！？」

と答えてしまつた。涼はびっくりした顔で、
「えつ！？ つて忘れたの？ 今日は誕生日よ？」

「あつそつか・・・」

（誕生日か・・・忘れてた・・・）

「まったく・・・信じられない・・・ 今日はいつも通りあたしの部屋よ！」

怒つたように言つた。すると晃は、

「ごめん・・・じゃあプレゼント何が良い？」

と聞いた。涼は少し機嫌が良くなり、

「じゃあ帰つてから考える。」

「分かつた。じゃ一緒に買いに行くか」と晃も言つた。

涼はすっかりご機嫌になつた。

キーンコーンカーンコーン

「あつ！ やべ！ 急げ涼！」

チャイムの音がして2人はあわてて校門に入った。

「ハアハアハア、セーフ」

「間に合つたあ！ 教室行かなくちゃ！」

始業式の日から2人は騒々しかつた。

放課後

「じゃあねえバイバーイ」

「ばいばい」

涼は友達と別れ急いで家に帰った。

ガチャ

「ただいま 晃いる?」

すると晃が暇そうに寝ころみながら

「おかえり! 遅さい!」

とふくれていた。

「ゴメンね、じゃあプレゼント!..

「何が良いの? 何でも良いよ。」

「本当に?..」

涼の口がはずんだ。

「うん」

「じゃあ・・・」

涼の顔が赤くなつた。

「何だよ、何にするの?」

「じゃああたしとつきあつてくれる?..」

(・・・ ・・・ ・・・ ・・・)

「 ・・・ ・・・ ・・・ ！」

「晃が好き!」

「 ! ! ! ! ! えつ ! ?」

「うん・・・ダメ?」

晃はびっくりしながらも・・・

「いいよ・・・つづーか! 僕が言おうとしてたのこ・・・くそつー..

と言いつつ涼に抱きついた。

「ありがとう晃・・・」

「 ・・・ ・・・ ・・・ ・・・ ！」

土曜日

2人は遊園地へ出かけた。

「ワーアー! 晃! あれ乗ろ!..」

涼が指を指した。それは、コーヒーカップ!

「あれっ! ?」

「うん、乗るー!」

晃は「一ヒーカップが苦手だつた。

「あんまりいっぱい回さないでね?」

涼が言うと、晃は安心した顔で、

「あつ大丈夫、俺、回せないから。」

と答えた。

「そつか

2人はすごす」とカップに乗つた。

「きや!動き出したよ!」

「おお!回つてる!はええ!」

初めて乗るかのように2人は大はしゃぎだつた。

「ああ楽しかつた。次はジェットコースター乗るうか!」

「うん!」

2人はジェットコースターに乗ることにした。

ゴーガタガタド――――――

周りの景色が一瞬にして消えて行く

「きや――――」

降りると2人は疲れていた。

「ちょっと休むか・・・」

「そうだね。おなか空いた。」

晃は時計を見た。針は午後6時を指していた。

「あと1時間で閉園だ。6時半から花火があるだろ、観覧車の中でも見るか」

「うん、おなか空いた。」

「分かった。観覧車の中で食おつ。パン買ってくるから観覧車のとこ並んでて。」

「うん」

涼は観覧車へ 晃は売店へ向かつた。

10分後2人は合流し、観覧車に乗り込んだ。

「わあ綺麗だねえ・・・ねえ晁！」

涼はそう言うと笑顔で晃の方を向いた。

「ああそり言葉はほんの餘裕だ」

2人はパンの封を開け食べ始めた。

バリツ
ハグツ

「おい、こいつ！」「Nだね、こわれ！」

二三

「お！花火！」

「キレーイ！・・・ねえ晃・・・」

涼は立ち上がり話しかけた。

10

「あたしを、パパとママとかと出かけた覚え無くてさ、まあ2人と忙しい人だったからでも、小さい頃からずつとさ晃がいるの。あたしの視界には晃がいるの。隣の家にいて生まれた日も場所も一緒に毎年誕生日は一緒に祝って、普段の日も一緒に遊んで、

緒が良かつたからさ。

「めんね県」を描くが好きで

ヒューバン

観覧車から降りるともう7時になっていた。

「おお、おお。いいやつだ。」

「2人は遊園地を出て夜道を歩き出した。
「樂しかったな！また来ようつ！」

「ああ」

「最後の花火！すごく大きかつたね！」「んな！」

涼は道の真ん中で大きく手を広げた。

その時、涼の後ろからトランクがつっこむことができた。

晃は思わず叫んだ。

「涼！」

しかし、ドンッ！

トランクは涼の身体を飛ばしあげ止まつた。

「涼、涼、涼、誰か救急車！」

目の前で涼は血を流し倒れていた。

救急車が来て病院に運ばれた。

ピッピッピッピッピッピッピッ

「涼、もうすぐ病院だから・・・」

晃は祈るしかなかつた。しかし

ピッピッピッピッピッピ---

「涼！涼！りょう！」

願いもなく涼は逝つてしまつた。

涼をはねた車は、すぐに捕まり、逮捕となつた。

晃は家に帰り、あわただしく電話をかけていた。涼の家に、

「もしもし？伊山です。涼が涼が・・・」

【どうしたの？晃君・・・】

晃の目蓋からからは大粒の涙が流れていった。

「涼が事故で・・・」

【事故！？涼は無事なの？】

「涼は亡くなりました。」

【うそつ・・・晃君嘘でしょ？】

（嘘じやないよ・・・おばさん 嘘だつたら電話なんてしないよ。

俺だつて嘘だつて言いたいよ。）

「本当です。俺と遊園地に行つた帰りにて、トランクには、はねられました。」

涼の母はびっくりして、電話を落とした。

【そつそんな・・・】

「おっおばさん?とにかく病院に来てください。俺、涼の側にいますから。」

力チャン 晃は苦しいのをこらえ電話を切り病院に向かう。

一方、涼の家では、涼の母が電話機の前で腰を抜かしていた。

「おい、お前、どうしたんだ?」

「あ、あなた、涼が・・・私たちより先に・・・」

父はそれだけでわかつたらしい。

「うそだろ? 病院・・・病院に行こう!」

「本当よ、今、晃君から電話があつたの。」

「そんなことどうでも良い! 病院へ行つて確かめるんだ。」

父は母の手を引き病院へ向かつた。

晃は先に病院に着き涼の両親を待つた。

「晃君! ! !」

涼の両親は晃の事をじつと見て少しすると下を向いた。

晃が首を横に振つたからだ。

「こっちです。」

力チャヤ 晃は扉を開けた。そこにはいかにも生きて笑つているかのように涼が眠つていた。

涼の両親は涼の横に来て涼に話しかけた。

「涼? ねえ涼、目を開けて・・・マ、ママつて言つて? 涼ちゃんママつて言つてよ。」

ぽんつ 父は母の肩に手を置き、涙をこらえながら首をふつた。

「涼ちゃん、なんでなんで?」

母は涼の横で『なんで?』と繰り返し泣いていた。

晃は扉の横で下を向いていた。すると

「こ、晃ちゃん・・・」

涼の母が晃に話しかけた。晃は母の側に寄つた。

「晃ちゃん、涼は涼は笑つてた?」

母は晃に意外な質問をした。

(えつ・・・)

「涼は泣いてなかつた？笑つてた？」

晃は涙を流しながら返事をした。

「笑つてましたよ、いつも、俺の方に顔向けて笑つてました。母は安心した顔で俺に言つた。

「良かつた・・・涼笑つてたんだ。いつも1人にしてたから、怒つてると思つてた。」

「おばさん・・・そんな事ないと思いますよ。涼はお2人の事尊敬してたんじやないかな？だって、お2人の事話す時、いつも笑つてたもの・・・」

これまでぼうっとしてた2人の顔から涙がこぼれた。

「そつかあ」

後日、晃は忙しい涼の両親変わつて涼の部屋を片付けていた。
(ふう大分片付いた。後は、机の上だけ)

晃が机の上にのつてている引き出しを開けた。
そこには、涼が書いた手紙と日記が入つていた。
日記は開けずに手紙のあて先を見た。

『ママへ

2005、9、6』

日付は昨日だつた。朝、出すつもりで書いたのだろう。

晃は、この手紙を涼の母に届ける事にした。

(んつ！？何か重なつてる。)

それは晃宛ての手紙でした。晃はそれを開けて中を読む。

『晃へ

ありがとう

友達になつてくれてありがとう

彼氏になつてくれてありがとう

わががま聞いてくれてありがとう

晃だけにあたしの夢を教えます！それわ・・・やっぱり内緒！

日記には書いたけど・

これからもヨロシクね！

涼

夢 晃は何だつたのか知りたくなり、涼の日記を開いた。

まだ、真新しい、1ページしか書いてありません。でもその中に涼の夢が書いてあった。

「・・・晃と結婚する・・・」

晃は涼の書いた、文字を棒読みし、笑った。

「ふふ、そつか、俺も同じ夢だよ。涼・・・」

結婚しようつ?

「えつー?」

晃、あたしと結婚しようつ?

「涼?」

うん、晃目閉じて、あたしがいるよ

晃は目を閉じた。そこにほいくもの涼が微笑んでいる。

「涼・・・見つけた・・・」

晃、結婚しようつ?

「うん、いいよ」

それを聞くと、涼は涙を流しながら

ありがとう、晃、大好きだよ

「うん、俺も」

そして、少しずつ消えながら

ママ達に言つといて、涼は笑つてます。だから泣かないでつ

て

「うん、伝える。」

すると、涼はすうっと笑顔で消えていった。

晃は、目を開くと、涼の部屋をきれいに片付け部屋を出た。行き先は、涼の実家、

ピンポーン

「はーい」

ガチャ 母親が出てきた。

「あら、晃君、どうしたの?あがつて

晃は家中に入つた。

母親は、お茶を出しながら話しかけた。

「『めんね、晃君、涼の部屋お願いしちゃつて。』

「いえ・・・」

「それで、今田はまだいたの?」

母親が、椅子に座つてこうと聞いて。

「さつき、涼に会いました。」

「えつ！？』

母親は驚き動搖した。

「それで、涼は、俺に言いました。結婚しようって。」

「そんな、晃君、嘘でしょ？」

「嘘じゃないんです。』

晃は、そう言つとバックから日記と手紙をだし、母親に渡した。

「涼が生前に書いていたものです。』

母親は中身を読み始めた。

『ママへ

お元気ですか？涼は元気だよ

涼に彼氏が出来たよ。晃だ

今日は一緒に遊園地に行つてくれるの

涼は、将来晃と結婚したいと思つてるんだ 晃なら良いでしょ？

晃には明日にでも言おうと思つてるんだ

じやあまた手紙書くね

涼

2005、9、6

『本当、涼の字だわ。』

母親はまたびっくりした。

「俺の手紙には書いてないのですが、日記にはちゃんと書いてある

んです。』

「晃君が言つなら私も信じるわ、でも結婚は田那がなんて言つたか

力チャ

「私は晃君なら、賛成だよ、いつも涼の側にいてくれたのだから・

・

「あなた・・・」

「ありがとう晃君・・・」

「いいえ」

「そう言えば、晃君は進学するの?」

母親が晃に聞いた。

「いえ、高校も中退して、実家の農家を継^ひいりと思つていてます。今実家に誰もいないんで・・・」

「そつか・・・じゃあ式はこちらでやるつか。」

(結婚式か、その方が良いか。)

「はい、でも葬式のほうは?」

晃は2人に聞いた。

「ああ、それはやらない事にしたんだ。涼は私達の心の中で生きているからね。」

「そうですか。では式の日程とかが決まつたら、教えてください。」

「ああ」

「それじゃあ、失礼します。」

晃は立ち上がり玄関へ向かつた。

「涼の荷物は暇が出来たら取りに行くよ。だから、それまで頼むよ、

晃君。」

「はい、あつそうだ。涼から伝言です。涼は笑つています。だから、泣かないで、だそうです。」

そう言うと、ドアを開け家を出て行つた。

2人はくちを押さえ、泣きながら微笑んでいた。

晃は、学校を辞め、バイトに励むようになつた。
そしてときどき聞こえるのです。涼の声が・・・

ブルルルルルブルルカチャ

「もしもし、伊山です。あ、おじさん?」

「晃君?式の日程が決ました。式は、来週の土曜日。」

「はい、大丈夫です。はい、はい」

式の日程が決まり晃は安心した。

(ふう・・・良かつた決まって)

親戚とかは呼ばずになるべく小さな式にする事になった。

式前日

声がした。

晃!

「ん?涼?どうしたの?」

いよいよ明日ね

「うん」

皆に伝えたい事があるから明日は手伝ってね。

「わかった。」

じゃあ、お休み。

「お休み、涼」

(どうやって伝えるんだ?...)

晃は涼を信じて考えるのはやめた。
自分も大変だからだ。

式当日

晃は朝から挨拶回りで大忙しだった。
そして、式が始まった。

晃は、涼の写真を持って会場に入る。
会場の中は、大きな拍手でいっぱいでした。

小さな式にすると言っていたのに高校のクラスメートなど沢山
の人人が会場に集まつた

◦

アナウンス『新郎の挨拶』

晃は立ち上がりマイクを握りました。

晃、ガンバ

(涼、ありがと)

「本日はお忙しい中、ご来場ありがとうございます。それで、私の妻は今ここにいない訳をお話します。3週間前、涼はこの世の人ではなくなりました。事故でした。

しかし、涼は私の心の中で生きています。そして、声がします。ありがとうとかお休みとか、彼女は私に話しかけてくれます。

涼がここに実際いなくとも、私の心の中に生きています。だから私は涼と結婚する事にしました。涼は私の宝物です。今日は、涼も話したいと言っています。聞いてあげて下さい」

晃は目を閉じた。

皆さんこんにちは、涼です

【皆さんこんにちは、涼です。】

私は幸せでした。

「私は幸せでした。」

(涼・・・)

じょじょに2人の声が重なる。

「私は、両親と遊ぶことが少なかつた代わりに沢山のことを知りました。友達が沢山でき、沢山の感情を知りました。だから、私は幸せでした。そして、晃は私と共通点が沢山あります。生まれた日、場所、血液型、どれもそろっています。そして、小さいころから私のわがままを聞いてくれました。死ぬ間際も死んだ後も私のわがままを聞いてくれました。だから私は幸せ者です。私は心を込めて晃に言います。

ありがとう・・・そして、パパとママ泣いていませんか？笑っていますか？私は笑っています。パパとママの心の中で笑っています。皆さん的心でも笑っています。だからどうかお願ひです。私が死んでも泣かないでください。私は皆さん的心の中で生きています。ではお元氣で・・・

(・・・涼、お疲れ・・・)

ありがとう 晃

晃は目を開けマイクに向かつて言つた。

「これで終わります。」

パチパチパチガタつ、ガタツガタツ

会場の人々が拍手しながら立ち上がってくれました。

(よかつたなあ涼)

うん

2人は嬉しさのあまりに涙がこぼれた。

晃は涙をぬぐって席に戻る。

アナウンス「次は同級生の皆さんによるki「ororoの未来への合奏です。」

友「晃！涼！結婚おめでとう！涼聞いてる？これから涼の大好きな未来へを合奏するよ！聞いてね。」

(涼良かつたな、皆いるよ)

うん

合奏が始まった。晃は目を閉じていた。少しすると

ねえ晃

(何?)

この歌となら逝けそうだよ

(涼?)

ありがとね、晃、そろそろ行かなくちゃ
(もう行くの？昇るの？)

うん、私は晃の心の中で生きているから、・・・・ご

めんね・・・・今だけ泣かして

(ああ、気を付けてね、大好きだよ)

ふふ、晃、未来へ向かって頑張つて！ I LOVE Y

OU 晃に会えてよかつた。

涼は涙を流しながら星のように散つていった。

晃の目から少しづつ涙があふれてきた。

合奏が終わり目を開けると目の前には涼の使い古したブレスレット
が置いてあった。

「つたく、何も言わずに置いて行きやがって。」

晃は、苦笑いをすると、ブレスレットをてに付けた。
無事式も終わり3年後・・・

「ただいま」

晃は、やっぱリアパートに残り仕事を探している。

右手にはちゃんと涼のブレスレットをして・・・なぜか、それは涼の事を忘れないように、

あたしは晃の心の中で生きているよ

そう、涼は今も、いや、これからもずっと・・・

晃の心の中に笑顔で生き続けている

きみと笑顔は

僕の心の中で・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8261b/>

きみと笑顔は僕の心の中で・・・

2010年10月10日10時43分発行